

|             |   |
|-------------|---|
| Title       | 社會政策學會第九回大會記事   |
| Author(s)   | 高田, 保馬  |
| Citation    | 經濟論叢 (1915), 1(6): 781-800  |
| Issue Date  | 1915  |
| URL         | <a href="http://dx.doi.org/10.14989/126925">http://dx.doi.org/10.14989/126925</a> |
| Right       |   |
| Type        | Departmental Bulletin Paper   |
| Textversion | publisher   |

學大科法學大國帝都京

# 叢論濟經

號六第

卷一第

## 論說

●米價ノ騰落ト其調節ニ就テ(二)

●穀物倉庫論

●貧富問題(三)(完)

## 雜錄

●大藏省證券ニ就テ尾上學士ニ應フ

●南洋新占領地研究ノ二

●保險學說ノ發展(二)

## 雜報

●經濟的進化ト人口法則(二)(完)

●最近ノ金融問題(二)

●廣告稅ト廣告官營

●戰爭ト英國ノ貿易

●社會政策學會第九回大會記事

●京都法學會大會記事

法學博士 戸田 海市

助教授 河田 嗣郎

法學博士 田島 錦治

法學博士 小川 郷太郎

助教授 山本 美越乃

法學士 小島 昌太郎

講 師 米田 庄太郎

法學博士 谷村 一太郎

助教授 神戶 正雄

講 師 河田 嗣郎

高田 保馬

## 社會政策學會第九回大會記事

講師 高田保馬

社會政策學會第九回大會ハ十月二十三日、午後一時、東京高等商業學校大講堂ニ於テ開カル。此日曇天、少シク細雨アリ。會ハ東京法科大學教授法學博士金井延氏ノ開會ノ辭ヲ以テ始マル。博士ハ先ヅ、東京商業學校ガ該學會ニ與ヘラレタル便宜ヲ謝シ、一轉シテ、討議問題タル「社會政策ヨリ觀タル稅制問題」ノ重要ナル理由ヲ縷述シテ曰ク、

今日ノ世界ニ有力ナル一國家トシテ居ラントスル以上、何レノ國モ其大體ノ方針ガ積極的トナルハ已ムヲ得ザル事ナリ。從ヒテ、國庫ノ負擔ノ漸次重キヲ加フルモ亦、免レザル事ナリ。他ニ特別ノ財源ヲ有セザル以上、此膨脹セル國費ハ之ヲ單ニ、自然増收ノミニ依頼ス可キニ非ズ。或ハ公債ノ方法ニヨル事アランモ

結局ハ主トシテ、租稅ノ新設又ハ増率ニ依ル外ナシ。列國ノ大勢皆然リ。而シテ特ニ我國ハ二回ノ大戰役ニヨリ、一躍シテ列國ノ間ニ有力ノ地歩ヲ占ムルニ至レル結果、此必要ヲ感ズル事別シテ甚シキモノアリ。今日ノ所、到底減稅ヲ望ム可キニ非ズ。減稅ハ望ム可キニ非ザレドモ、稅制其物ガ社會政策的の見地ヨリ見た、其當ヲ得タリヤ否ヤ。租稅ハヨシ、ソガ比較的輕キ場合ニ於テモ其影響ハ社會政策上ヨリ見テ看過ス可カラザルモノアリ。其漸ク重キヲ加フルニ於イテ、益注目ヲ要ス。然ルニ從來我學界ニ於テハ、稅制ヲ社會政策ノ見地ヨリ研究スルコト未ダ行ハレズ、コレ實ニ稅制問題研究ノ一缺陷ナリト信ズ。本討議問題ノ選バレタルモノ、此缺陷ヲ補フニ多少ノ貢獻ヲナサンガ爲ナル可シ。

開會ノ辭終ルヤ、東京高等商業學校長法學博士佐野善作氏登壇、歡迎ノ辭ヲ述ベ、此有力ノ學會ノ同校ニ於テ開催セララルコトニ就キ、同校ノ學生ガ利益ヲ受クル事大ナル可キヲ謝セラレタリ。

次デ討議問題トシテ選定セラレタリシ「社會政

策ヨリ觀タル稅制問題」ノ報告ニ移ル。報告者ハ河津小川田中ノ三博士ナルガ、田中博士ハ其總論ヲ、小川博士ハ日本ニ關スル研究ヲ、河津博士ハ歐洲ニ關スル研究ヲ分擔セラレタリ。

### 報告第一席

早稻田大學教授 田中穗積氏  
法學博士

社會政策ノ目的ニ課稅ヲ利用シ、之ニヨリテ分配組織ヲ整理セントスル學者ハ少カラズ。此ノ如ク貧富ノ懸隔ヲ租稅ノ力ニヨリテ調和ス可シト云フ思想ハ獨逸ニ於テハ既ニ十八世紀ニ現ハレタルガ、最近ニ於テ極力之ヲ主張スルモノハWagnerナリ。其考ニヨランカ、財政ハ社會ニ於ケル富ノ分配上重大ナル影響ヲ有スルガ、特ニ租稅ノ徵收ニ於テ然リ。從ヒテ苟モ、分配ノ上ニ惡影響ヲ及ボスガ如キ稅制ハ之ヲ避ケザル可カラザルナリ。加之、今日ノ社會ニ於テハ、更ニ進ミテ、積極的ニ租稅ノ力ニヨリテ、分配ヲ整理セザル可カラズ。現在アルモノハ總テ善シト云フ見地ヨリ見レバ、比例稅法ハ公平ノモノトシテ是認セザル可カラズト雖モ、今日ノ如キ貧富ノ懸隔ヲ匡正スル社會政策ノ見地ヨリスレバ、累進稅法ヲ採ラザル可カラザルナリ。マタ同様ノ理由ヨリシテ、不勞利得ニ對スル課稅稅率ヲ重クス可ク、生活上ノ最少限收入ノ獲得者ニハ課稅ヲ免除ス可シ。余ハ此主張ニハ反對ナリ。然レドモ此稅法ソノモノニハ贊成ナリ。之ヲ贊成スルハ全ク他ノ見地ヨリス。即チ、社會政策ノ見地ヨリセズシテ、負擔ノ公平ト云フコトヨリ說カントスルナリ。カク、給付能力ノ點ヨリシテ、累進稅法ヲ主張スル論據ハ多シ。獨

界効用說ニヨル事ヲ得可シ財物ハ其分量ヲ増スニ連レ一定量ニ對スル効用ヲ減ズ。千圓ノ收入ノ獲得者ノ間ニ有スル疆界効用ト、三千圓ノソレトハ相異ナリ。給付能力又ハ負擔能力ニ比例セル課稅ハ、累進稅ナラザル可カラズ。マタ、平等犧牲ノ原則ヨリ考フルニ、收入ノ一部ハ消費セラレ、他ハ他日ノ生産營利ノ用ニ供セラル。消費ノ方面ヨリ見ルニ納稅ノ爲ニ消費ヲ節セザル可カラザルガ、此節セラルル部分ハ收入ノ大ナル者程奢侈的性質ヲ帶ブ。生産營利ノ方面ヨリ見ルニ、大資本ホド其利益ノ割合大ナリ。カクテ何レノ方面ヨリ見ルモ、平等ノ苦痛ヲ與ヘントセバ累進稅法ニコラザル可カラズ。マタ財產收入ハ確實ニシテ勤勞收入ハ不確實、其間ニ稅率ヲ異ナランムルハ、負擔ノ公平ヨリ見テ當然ノコトナリ。最少限ノ生活費獲得者ニ對スル免稅ニ就イテハ異論アリ。國家ノ個人ニ對スル必要ノ程度ハ空氣水ノソレト相同ジ。生活ヨリモ國家維持ノ經費ガ輕シト云フ事アル可カラズ、生活最少限ノ收入ニ免稅スルハ輕重ヲ誤レリト。然レドモ、之ニ課稅シテ生活費ヲ奪ハバ國家ハ救助ノ義務アル可シ。右ニ奪ヒテ左ニ與フルハ遊戲ノミ。負擔ノ公平上之ヲ免稅スルハ當然ナリ。租稅ニヨリテ積極的ニ分配ヲ整理セントスル見地ヨリ、同一ノ内容ヲ主張ストセバ、次ノ如キ弊害アリ。(一)正義ノ原則ニ反ス。人ハ生レナガラニシア不平等ナリ、其間ニ優勝劣敗ノ行ハルルハ自然ナリ。國家ノ權力ニヨリテ、強イテ平等ナラシメントスルハ、正義ニ反ス。(二)社會政策ノ本旨ニ反ス。貧富ノ懸隔ヲ小ニスルヲ以テ、能事ヲレリトナサバ、野蠻人ノ社會ハコレ理想ノ社會ニ非ズヤ。(三)下層社會ノ生活狀態ノ改善ハ生産ノ進

歩ト伴ハザル可カラズ、徒ニ之ヲ急イデ生産ノ進歩ヲ危クスルガ如キハ取ル可カラザルナリ。コレヲノ理由ヨリシテ、積極的ニ分配ヲ整理スル目的ヲ以テ、稅制ヲ安排セントスル傾向ハ有害無益ナリト信ズ。然レドモ、公經濟ト私經濟トハ密接ナル關係ヲ有スルガ故ニ、稅制ガ特ニ注意ヲ要スル事ニ就イテハ、余ノ見地ヨリ見テ滿腔ノ賛意ヲ表ス。

然ルニ、此重要ノ問題ガ動モスレバ歐洲ニ於テモ閉却セラレツツアリナ、日本ニ於テハ特ニ甚シ。大體ヨリ觀察スルニ、今日ノ各國ノ稅制ハ貧富ノ懸隔ヲ甚シカラシメントスル傾向アリ。就中英國最モ其獨逸最モ惡シ、日本ハ主義ナク方針ナシ。然ラバ此ノ如キ判斷ハ何ヲ意味スルヤ、ソハ消費稅ノ輕重ヲ云フ也。獲得スル收入ヲ標準トシテ課稅スルハ當然ナリ。負擔力ハ收入ノ多少ニ比例スレバナリ、然ルニ消費ニ課稅スル理由如何。若シ眞ニ公平ニ收入ヲ標準トシテ課稅スルヲ得バ、消費稅ハ必要無し。然レドモ、收入ニ對スル公平ノ課稅ハ絶對ニ不可能ナリ。當ニ收入ガ精確ニ知リ得ラレザルノミナラズ、同一金額ノ收入ト雖モ其源泉如何ニヨリテ負擔力ニ多大ノ差等ヲ生ズ。而シテ各人ノ收入ハ其源泉ニヨリ割合種々ニ相異ナリ。故ニ收利稅ノミヲ以テシテハ、決シテ課稅ノ公平ヲ期シ得ル所以ニ非ズ。宜シク補フニ消費稅ヲ以テセザル可カラズ。

然レドモ消費稅ニ於テハ、課稅物件ノ選擇頗ル困難ナリ。奢侈品ニ對スル課稅ハ脫稅隱蔽極メテ容易ナルガ、必要品ニ課稅スルノ不可ハ言ヲ俟タズ。カクテ各國 Commodity 使用スル貨物ヲ標準トナセリ。然レドモ之ニ課稅スルモ負擔ノ公平ハ望マレズ

事實逆進稅タルヲ免レザルナリ。然ルニ拘ハラズ、各國皆其消費稅ヲ增加スルハ、徵稅ノ容易ナルガ爲ナリ。下層民ハ重稅ヲ課スルモ反抗セズ、コレ其一ノ理由。消費稅其物ノ本質トシテ負擔シ易シ、租稅負擔額ヲ負擔者自身、自由ニ選擇スルヲ得レバナリ、コレ其二ノ理由。由カクテ負擔ノ公平ハ閉却セラレテ各國共消費稅ヲ増徴シ、社會政策ノ方向ニ逆行セリ。

詳細ノ批評ニ至リテハ、地方稅ヲ併セ考フ可キモ、今ハ專ラ國稅ノミニツキ、各國ノ稅制ヲ此見地ヨリ概觀セントス。佛國ハ、昨年ノ豫算ニヨルニ、收利稅六億七千五百萬法、消費稅專賣事業收入ヲ含ム、三十五億一千六百萬法、二者ノ割合ハ一六對八十四ナリ。同國ノ地方稅ニ亦同一ノ傾向アリ。獨逸ハ二十世紀ニ入りテ三度増稅ヲナシタルガ、其跡ヲ見來ルニ亦社會政策ニ背馳セリ。一九〇六年ノ増稅ハ收利稅一億一千四百萬馬克、消費稅ニ七千四百萬馬克（此割合六對四）、一九〇九年ノ増稅ハ甚ダ失敗ニシ、收利稅一億二千七百五十萬馬克、消費稅三億一千萬馬克（此割合三對七）一九一三年ノ陸軍大擴張ノ經費ハ、大部專ラ收利稅ニヨリシガ故ニ、前回ノ失敗ヲ補フヲ得タリ。英國ハ十九世紀末以來、稅制改革及ビ増稅ノ度毎ニ負擔ノ公平ニ向ヘルヲ見ル。一八九四年所得稅ノ増收、死亡稅ニ累進稅法ヲ斷行シタル事、コハ比例稅一天張ノ同國ニ於テハ破天荒ノ計劃ナリキ。二十世紀ニ至リ、更ニ一般ノ改善ヲ見タリ。一八九九—一九〇二ニ亘レル南阿戰及團匪戰ノ爲ニ要シタル二億一千萬磅ノ七割ヲ公債、三割ヲ増稅ニ得、此三割ノ増稅ハ收利稅五、消費稅五ノ割合ニ課セラレタリ。而シテ戰後先ヅ消費稅ヲ輕減シタリ。一九〇六自由黨

内閣組織セラルルヤ、先ヅ手ヲツケシ改革ハ勸勞所得ノ稅率ヲ輕クシ、死亡稅ヲ重クスルコトナリキ。次デ有名ナルイ。ゴ。チ。ム。に。ち。ノ豫算ハ其増稅總額二千三百萬磅中、收利稅千五百萬磅、消費稅八百萬磅、此割合二對一ナリ。十九世紀末以來、最近迄ノ英國ノ財政狀態ヲ通觀スルニ、一步一歩負擔ノ公平ニ近クルヲ見ル。一八九九—一九二〇間ニ於イテ、收利稅ノ増加ハ九割ニシテ消費稅ノ増加ハ一割ニ過ギズ。我國ニ於イテハ之ト頗ル趣ヲ異ニス最後ノ二回ノ増稅計一億四千四百六十三萬圓、内收利稅四割三分、消費稅五割七分、更ニ甚シキハ、最近ノ租稅改革ニシテ、前後三回ニ行ハレタル減稅ノ總額三千二百萬圓、内收利稅ハ二千六百萬圓ニシテ消費稅ハ六百萬圓ニ過ギズ。

## 第二席 京都法科大學教授法學博士 小川郷太郎氏

田中博士ハ大體ノ理論ヨリ稅制ガ如何ニ組立テラル可キカヲ説キ、立法ノ實際ニ及バレタルガ、余ハ日本ノ租稅制度ヲ社會政策ノ見地ヨリテ見其如何ナルモノナルカヲ述ベント欲ス。稅制ノ如何ニヨリテ、財產所得ノ分配ハ大ナル影響ヲ蒙ルモノナリ。租稅ノ爲ニ從來ノ貧富ノ懸隔愈大ヲ加フルニ至ラバ、コハ反社會政策的の租稅ナリ。又其爲ニ懸隔ガ幾分ニアモ縮メラルル事ヲ得ル事情ニアラバ、ソハ社會政策的の租稅ナリ、今ノ日本ノ稅制ハ果シテ社會政策的のナリヤ、又ハ反社會政策的のナリヤ、コレ今研究セントスル所ナリ。勿論此問題ヲ研究センガ爲ニハ、豫メ現在我國ニ於クル貧富ノ懸隔ガ、如何ナル程度ニアリヤ、又其變化ガ如何ナル方向ヲトリツツアリヤヲ知ラザル可カラズ、コハ自ラ別個ノ研究問題ニ屬シ、今詳細ニ之ニ答フル事能ハザレ

ドモ、大體上、貧富ノ懸隔已ニ著シキハ勿論、一方ニ於イテ富者益富ミ貧者ハ其狀態低下スルニ非ザレドモ、富者ニ對スル比較ヨリイヘバ愈々貧シクナルト云フ有様ニアリテ、現狀正ニ社會政策ヲ行フ可キ時期ニ達セルヲ見ル。此必要ニ應ジテ他ノ方面ニ於テハ、社會政策の見地ヨリ立法ヲナセルモノアリ例ヘバ工場法ノ如シ。然ルニ、租稅制度ニ就テハ如何之ニ關シテハ、カカル見地ヨリ實地ノ議論ヲ試ミタルモノ全ク無シ。余ハ以下此研究ノ結果ヲ述ベントスルモノナルガ、豫メ其結論ヲ揭ゲテ云ハン我國ノ稅制ハ社會政策ノ目的ニ適ヘルモノモアレドモ、大體ニ於テ之ニ反對セリト。

余ハ之ヲ日本稅制ノ組立ノ上ヨリ、又其稅率ノ上ヨリ見ントスルモノナルガ、稅率ハ各租稅制度中ニ定メラレタレバ、稅制ノ全般ヲ考フレバ足レリ。租稅制度ハ學理上收利稅消費稅交通稅ヲ以テ編ミ立ジベキモノナルガ、實際上ニ於テハ直接稅ト間接稅トヨリ編ミ立テラル。日本ノ稅制亦然リ。而シテ後者ノ廢ス可カラザルハ田中博士ノ説カレタルガ如クニシテ、社會主義者ガ消費稅廢止ヲ主張シツツアルモ實行セラルル能ハズ、又日本今日ノ社會政策ノ立場ヨリスルモ之ヲ廢スル必要ナシ。勿論消費稅ノミヲ見レバ不可ナルガ如シ、併シ直接稅ト結合セシムル結合ノ工合如何ニヨリテハ全體ノ上ヨリ見テ、公平ナル稅制ヲ形成スル事ヲ得可シ。故ニ消費稅自體ノミヲ捉ヘテ、判斷ヲ下ス可キニ非ズ、稅制全體ノ結合ヲ考ヘテ、判斷ヲナサザル可カラザルナリ。

消費稅ハ各人が消費スル事實ヲ捉ヘ、之ニヨリテ擔稅力アリト

見テ課稅ス。勿論、ソハ貧者ニ輕クシテ富者ニ重カル可キヲ要ス而シテ、消費稅ノ組織如何ニヨリテハ富者ニ重ク課スル事必ズシモ不可能ニ非ズ。例ヘバ、砂糖消費稅ノ如キハ種類ニヨリテ甚シク稅率ヲ異ニス。煙草亦品質ノ高下ニヨリ著シク價格ヲ異ニスルヲ以テ亦同一ノ性質ヲ有ス。然レドモ、社會政策的ノモノハ例外ヲナスニ過ズ。多クノ消費稅ハ殊ニ日本消費稅ノ中心ヲナセル酒稅ヲ初メトシ醬油稅ノ如キ鹽專賣ノ如キ、其稅率若クハ賣價ハ貧富ヲ通ジテ一樣ナリ。織物消費稅亦然リ絹布毛織物木綿ヲ通ジテ、稅率ハ等シク價格ノ一割ナリ。殊ニ甚シキハ、貧者ノミニ課シテ富者ニ課セザルモノアリ。石油消費稅ノ負擔者ノ大部分ハ、生活ノ程度低キ地方民カ、又ハ都會ノ貧民ナリ。然ルニ政府ハ一方ニ、石油消費稅ヲ課シナガラ、此等ニ比シテ生活程度ノ高キ電燈及ビ瓦斯燈使用者ニ對シテ全然課稅セズ。要スルニ、日本ノ消費稅ハ貧者ニ重クシテ富者ニ輕シ。

次ニ收利稅、即チ所謂直接稅中一般財產稅一般所得稅ニ就キテ考ヘン。歐洲ノ立法例ニハ、所得稅以外財產稅アリ。二者並立シテ富者ヲ重ク稅スル事トナレリ。日本ニハ普通ノ財產稅存在セズ、一種ノ財產稅ト見ルベキモノハ相続稅ノミ相續稅ハタダ財產ノ移轉スル時ニ課稅ス、故ニ之ヲ動的財產稅ト稱ス可シ。所得稅ハ所得ヲ得ルノ故ヲ以テ之ニ稅スルモノナレハ所得ヲ生セサル財產ハ之ニ稅スルコトヲ得ズ、然ルニ所得ヲ生セサル財產モ負擔力ヲ有ス、故ニ何所カニ於テ之ヲ捉ヘ之ニ課稅セザル可カラズ。所得ヲ生スル財產ニ就テ考フルモ、俸給勞賃等ノ所得ヲ生スル人ノ智力能力ヨリモ鞏固ナル基礎ヲ有スルモノナルカ故

ニ之ニ重ク税セサルベカラズ。相續税ハ此種ノ必要ヨリ生ジタルモノ、故ニ社會政策的見地ヨリスル時ハ勿論單ニ負擔ノ公平ト云フ考ヨリスルモ、決シテ之ヲ廢ス可カラズ。然ルニ我貴族院ニ於テハ、相續税ガ家ノ存立ヲ危クシ、延イテハ、日本固有ノ國家組織ヲ破壞スルモノナリトノ故ヲ以テ、其全廢ヲ主張スルモアリ。此ノ如キハ、反社會政策的思想ノ反映ト認ム可ク固陋ノ謬見ト云ハサルヘカラズ、家亡ブ可クバ他ノ理由ニヨリテ亡ブ可シ、税制ノ爲ニ亡ブルニ非ザルナリ。相續税其物ハ、此ノ如ク廢止ス可カラズトスルモ、小財産ハ税ヲ輕クシ又ハ之ヲ免セサルベカラズ、我法ハ其免稅點ヲ家督相續ニアリテハ二千圓、遺產相續ニアリテハ五百圓ト定メリ、富ノ進ムニ從ヒ之ヲ高メサルザルベカラズ。

次ニ所得税ニ就イテ見ルニ、收利税即チ所謂直接税ノ中心トナルベキ性質ノ税ナリ。我國ノ所得税法モ改正毎ニ次第ニ進歩シ來リ比較的、多ク、社會政策的思想ヲ帶ビタルヲ見ル、免稅點ヲ高メタルカ如キ、所得ヲ査定スルニハ、小所得ニハ定額ヲ控除シ又ハ勤勞所得ニハ一割ヲ控除スルカ如キ皆然リ、然レトモ尙以テ十分ナリトスベカラズ、小所得ニ輕クセント欲セバ、別ニ意ヲ用フ可キ點多シ。同一ノ所得額ニテモ、事情ノ如何(家族ノ多寡疾病等)ニヨリテハ負擔力ニ著シキ差異アリ、宜シク之ヲ斟酌セガル可カラズ。マタ累進税率ニ於テ、社會政策的意義ノ著ク現ハレタルヲ見ルガ如キモ、コハ仔細ニ觀察スルヲ要ス。一(課税ノ基礎ハ各人が所得ノ申告ニアリ、而モ其申告ハ多ク虚偽ナルヲ忘ル可カラズ。累進税率ハ事實ニ於テ其効用ヲ減殺セラレ居レ

リ。二)累進ノ起點ガ千圓ニシテ、税率ガ一厘千分ノ二十五トナレリ、此率ハ此程度ノ所得トシテ高キニ過ケ。三)合名會社合資會社ノ所得ニ對シテハ個人所得ニ對スルヨリ累進率低シ株式會社ニ至リテハ比例税アルノミ。其税率ハ千分ノ六十一半ナリ。一萬五千圓ノ所得ハ個人ノモノナラバ其所得税ハ千百圓ナリ、株式會社ノモノナラハ九百三十七圓ナリ。所得カ一萬五千圓以上トナルニ從テ、株式會社所得税ガ個人所得税ヨリモ愈々輕クナルナリ。故ニ個人企業ヲ株式會社組織ニ改ムルノミニシテ、脱税ハ容易ニ行ハル。殊ニマタ、富者ヲ株主トスル株式會社ノ税率千分ノ六十二半ハ千圓ノ個人所得ノ税率千分ノ二十五ニ比シテ、餘リニ均衡ヲ失シ、社會政策ノ目的ヲ達スル事能ハズ。

ナホ、所得税ト收益税トノ對立ニ就イテ考ヘント欲ス。所得税ハ日本ニ於イテハ實際上、勤勞所得ニ重ク、財産所得ニ輕シ。負擔ノ公平ヲ期センガ爲ニハ所得税以外、之ト相並ビテ特ニ富者ニ重ク課スル税制ヲ組織ス可シ、コレ收益税制ナリ。土地ト云フ所得ノ泉源ヨリ負擔力ヲ推定シテ地租ヲ課スルモ、此目的ニ副ハンガ爲ナリ。但シ、市街地ニアリテハ進ミテ家屋税ヲ課セン事ヲ要ス。明治四十二年來地價ヲ修正シ、實際上宅地租ヲ重クシタルモ、市街地ノ地價ノ騰貴ハ遙ニ大ナリ。宜シク此土地ト、其上ニ建設セラレタル家屋トヲ併セテ、之ニ家屋税ヲ課ス可キナリ。マタ營業税ヲ課スルモ、亦此目的ニ副ヘリ。コレ土地ノ收入ニ所得税ヲ課スル外地租ヲ課スルト同ジ。然ルニ我國ニハ營業税全廢論者アリ。同志會ハ在野ノ時ニ之ヲ唱ヘ、國民黨亦之ヲ説ク、此ノ如キハ甚シキ謬論ナリ。勿論、營業税法中改正ヲ要スル



點アルハ之ヲ認ムト雖、營業稅其物ノ必要ナルハ上ニ述ベタル  
ガ如シ。然ルニ之ヲ廢止セントス、ソノコト既ニ社會政策ノ本旨  
ニ反スルノミナラズ、地租ノ全廢ヲ唱ヘズシテ、營業稅ノ全廢ノ  
ミヲ主張スルハ、是明ニ商工業者ニ私スルモノナリ。富力ニ於イ  
テ最弱ク、而モ虛偽ノ申告ニヨリテ所得稅ヲ免ルルモノ多キ商  
工業者ノミヲ免稅セントスルモノナリ。

マタ、營業ニ卸サザル資本アリ、之ニ對シテ課稅スルノ要ヲ認ム  
コレ所得稅ノ外土地ニ地租アリ、營業ニ營業稅アルト同ジ。此種  
ノ課稅物件ハ公債社債及ビ株券ナルガ現在コレ等ノ有價證券ニ  
對ヘル所得稅ハ甚ダ輕キニ過グ。公債社債ノ利子ニ對シテハ所  
得稅中第二種ノ所得稅トシテ十分ノ二十ヲ課スルニ過ギズ。其  
利子ハ如何ニ多クモ累進率ノ適用ヲ受クルコトナキノミナラ  
ズ、他ノ所得ト合セテ、稅率ヲ加減セラルルコトナシ。所得稅ト  
云ハシテモ資本利子稅ト云フヲ適當トス、國債ニ至テハ全ク  
稅ヲ免ル、マタ株ノ配當金ニ對シテハ僅ニ會社ノ純收益ノ一部  
分トシテ低キ比例稅率ヲ課シタルノミ、之ヲ受クル大富豪ハ此  
配當金ニ伴フ可キ累進率ヲ免レ居ル事前ノ場合ニ同ジ。社會政  
策ノ眼ヨリ見レバコレ正ニ逆進の租稅ナリ。宜シク別ニ之ニ對  
シテ課稅スル所ナカル可カラザルナリ。其他不動産ニ就イテハ  
土地増價稅ヲ起ス要アルト共ニ、土地、會社事業、投機ニヨリ暴  
富ナ成シタルモノ亦課稅セラル可ク、歐洲ニ於テハ、戰爭ニヨリ  
暴利ヲ得タルモノニ對シ臨時稅トシテ課稅シツツアルガ、之マ  
タ我國ニ移ス可シ。

之ヲ要スルニ今日ノ急務ハ廢減稅ニ非スシテ、社會政策ニ反對

ナル方向ニ走ラントスル稅制ヲ匡正シテ之ヲ公平ナラシムルコ  
ト也。

### 第三席

東京法科大學教授法學博士

河津瀧氏

歐洲稅制發達ノ趨勢ヲ見ルニ、一方ニ於テ國費漸ク膨脹スルガ  
爲ニ新ニ租稅收入ノ增加ヲ計ラザル可カラズ。而モ他方ニ於テ  
民主思想ノ旺盛ナルガ爲ニ此事甚困難ナルヲ免レズ。此ノ二要  
求ニ促サレテ、コソ社會政策の見地ヨリ、稅制ヲ整理セザル可  
カラザル事トナレリ。從來各國ニ於テ間接稅ニ重キヲ置キ、直  
接稅ニ輕カリシガ、社會政策上消費稅ハ喜ブ可キ租稅ニ非ズ。  
之ヨリ勢ヒ直接稅ニ稅源ヲ求メザル可カラズ。而シテ、カカル稅  
制ノ整理ニ當リ常ニ技術家ノ側ヨリ起ル攻撃アリ。社會政策的  
ニ稅制ヲ改正スレバ財政收入ノ減少ヲ來スト云フ事コレナリ。  
然レドモ、之ヲ歐羅巴ノ財政史ニ就キテ見ルニ、多クノ場合ニ  
ハ、其收入ノ減少極メテ短期ニシテ二三年ヲ越エズ、ソレヨリ  
以後ハ却リテ増加セリ。伊太利ノ稅制改革ノ成績、一八八〇以來  
ノ露西亞ノ稅制改革ノ成績皆然リ。コレ、社會政策的ニ整理スレ  
バ、國民ノ生産力増加シ、ソノ爲稅源ノ養ハルル結果ヲ生ズレバ  
ナリ。以下社會政策的ニ稅制改正ノ行ハレ來レル實例ヲ見ン。  
英國ニアリテハ直接稅ノ間接稅ニ對スル割合、比較的ニ良好ト  
ナレリ。然レドモ、コハ漸次ノ改善ノ結果ニシテ、以前ハ頗ル趣  
チ異ニセリ。穀物條例廢止以前ニアリテハ殆全ク間接稅ニヨリ  
シガ、十九世紀ノ半ヨリ直接稅ヲ多クスル傾向ヲ取レリ。即チ先  
ヅ所得稅ヲ起シタルモ、當初ハ種々ノ議論アリテ政府モ躊躇ス  
ル所アリ、臨時稅タラシメシガ、漸次收入ヲ増加シ、遂ニ一八七

○年代ノ末永久税トナシ一大税源ヲ形成スルニ至レリ。壽テ一八九四相續税ヲ興シ、直接税ノ割合漸ク殖ム。ろいじ、ぢよにち起テテヨリ養老金制度、國立保險制度ヲ實行シタルが、一九一〇ノ豫算ニ於テ之ニ要スル經費ノ不足約千四百萬磅、内七百萬磅ヲ間接税、七百萬磅ヲ直接税ニ仰ギタリ。間接税ノ増收ハ一方税率ノ増加ニヨルト共ニ、他方煙草、石油、自動車等ノ新消費税ヲ課シタリ。直接税ニ關シテハ所得税、相續税、地租ノ改正ヲ行ヒタリ。從來英國ノ所得税ハ複雜ノモノニシテ一般所得税ト收益税ト混淆セル形ヲ呈シタリ。而シテ總額百六十磅以下無税、七百磅以下ハ一定額ヲ控除シテ殘額ニ課税スル仕組トナリ、七百磅以上ハ比例税ヲ課セラレ、此税率ハ年々議會ニ於テ決定セラル。

一九〇七年勤勞所得不勞所得、ニヨリテ大ニ税率ニ輕重ノ別ヲ設ケタリシがぢよにちハ此精神ヲ襲ヒ、社會政策的の見地ヲ加ヘテ、過去ノ比例税ヲ改メテ附加税ヲ課スルコトニヨリテ累進税トナシタリ。即チ、五百磅以上ニ對シ一磅ニ就キ六片宛ノ附加税ヲ課シ大所得ノ者ハ率更ニ高シ。一方大所得ニ對スル課税ヲ重クシタルト共ニ、他方五百磅以下ノ所得ニ對シテハ子供一人ニツキ十磅宛ヲ控除シタリ。相續税法ノ改正亦注意ス可シ。相續税ハ一八九四以來採用セラレシモノナルが、四種ノモノアリ、中二重ナルハ estate duty ナリ。ソハ被相続人ノ遺產全部死亡前贈與セシ財産ニ對シテ課税ス。一九〇七ニハ百磅以下無税、百乃至五百磅ハ百分ノ一、ソレヨリ累進シテ七五萬乃至百萬磅トナレバ十分ノ一トナル。百萬磅ヲ越ユレバ内百萬磅丈一割、超過額ニハ累進率ヲ適用ス。ぢよにちハ之ヲ以テ輕キニ過グトナシ、百磅以

下無税百乃磅至五百磅ノ十分ノ一ハ以前ト相同ジキモ、ソレ以上ノ累進ノ勢ヲ更ニ加ヘタリ。以上ハ税率ノ變更ニ止ルガ更ニ地租ノ新設ヲ見ザル可カラズ。

地租ハ地方税トシテ從來存在シタリシモ、國稅トシテハ土地收益ニ對スル所得税アリテ、地租ノ用ヲナシタルノミ。然レドモ、英國ニハ遊地ヲ擁スル大地主アリ。其所有地ハ地代ヲ生ゼザルが故ニ、國家ハ之ヨリシテ何等ノ收入ヲ得ル事能ハズ。コレ財政ノ上ヨリシテ、一大税源ヲ失フ譯ナレバ、何トカシテ之ニ課税セントノ計劃アリシが、ぢよにち遂ニ之ヲ斷行シタリ。(underdeveloped land duty) 農工商工業ニ利用セラレザル土地ニ課税スルモノニシテ、地價一磅ニ付二分ノ一片ト云フ輕キ税ナルモ、之ヲ手掛リトシテ、將來如何ナル重税ヲ課スルヤモ知レズト云フ豫想ノ爲ニ、地主ノ間ニハ重大ナル問題トナレリ。下層民ニ對シテ除外例ヲ設ケシハ云フ迄モナシ。其他(二)土地増價税ヲ起シテ、土地所有者利用者變更ノアル場合ニ課税シ、十四年以上此變更ナキ場合ニ於テハ、十五年毎ニ課税ス。課税ノ方法ハ、期間ニ於ケル増價ヨリ一割ヲ減シテ、之ヲ課税ノ目的物トナシ其(三)二割ヲ徵ス、下層民ニ對シテハ除外例アリ。(三)復權税ハ土地ノ貸貸期限満了ノ際、此長期間ニ於ケル増價ニ税スルモノニシテ、改良ノ費用及ビ投下セラレタル資本ヲ引去リ殘餘ニ一割ヲ課税ス。(四)礦物權税ヲ新設シテ、礦山ノ地代ノ百分ノ五ヲ課税ス。此等從來存在セザリシ租税ヲ起シタル結果、社會政策的の見地ヨリ見た、直間兩税ノ均衡甚良好ニ向ヘリ。

終リニ獨逸ノ土地増價税ニツキテ一言セント欲ス。土地増價税

ハ聯邦稅又ハ都市稅トシテハ早クヨリ存在シタリ。一九〇八コハ宜シク國稅トナス可シトノ議論起リ、一九一〇該法案ハ始メテ議會ノ問題トナリ、一九一一二月議會ヲ通過シタリ。其主意ハ、所有者ノ行爲ヨリ起ラサル不動産ノ價格ノ増加ニ對シテ課稅スルニアリ、課稅率ハ増價ノ一割ヨリ始マリ、増價ノ大ナルニ伴ヒテ累進ス。此場合ニモ、社會政策的の見地ヨリシテ、擔稅力弱キ者ニ對シテハ除外例ヲ設ケ、其他ノ事實ニ關シテハ之ヲ略ス。

#### 第四席 各種消費稅ノ課稅方法ヲ論ズ

東京法科大學講師 工藤重義氏

消費稅ハ各國ニ於テ重要ナル收入ヲ形リツツアリ。昨年一月るゐ・ぼりゆうがにこのみすと、ふらんせにニ英佛獨ノ消費稅ヲ比較シタル所ニヨルニ（一九一二、一九一ノ決算ヲ本トセリ）佛國ハ消費稅（專賣收入ヲ含ム）五割三分、其他四割七分、獨逸ハ消費稅（帝國稅并ニ各聯邦稅ヲ合算ス）五割七分、直接稅四割三分、英國ハ消費稅四割六分、其他五割四分ナルガ、我國ハ大正二年度決算ニヨルニ、消費稅（專賣收入ヲモ）三億圓ニ對シ直接稅一億八千六百萬圓（六割二分對三割八分、專賣ヲ除ク時ハ五割五分對四割五分）トナレリ。而シテ此ノ如ク重要ナル地位ヲ占ムル消費稅ニ關シテハ、權威トナル可キ研究殆ド無シ。ココニ敢テ、日本ノ消費稅中特ニ重要ナルモノニ關シ、其課稅ノ方法ヲ論ジ、改良ノ提案ヲモ試ミント欲ス。

此時既ニ薄暮、會場ヲ高商大講堂ヨリシテ學士會俱樂部ニ移ス。食事了リテ後氏ノ講演ハ繼續

セラル。

酒造稅ハ稅額九千四百萬圓ニ達シ、恐ラク近キ將來ニ於テ意圖圓トナラン。先ツ其課稅標準ヲ見ルニ現行法ニヨレバ製成ノ時之ヲ査定ストアリテ製品課稅法ヲトレルガ如シ。併シソハ形式的ノモノナリ、釀酒ニシタル時査定シ滓引減量ヲ百分ノ二ト見積レドモ、實際ソハ百分ノ四以上ニ達スルノミナラズ、其他自然減量亦少カラズ。從ヒテ一石貳拾圓ノ課稅ハ實際其以上ニ上レリ。之ヲ改メンガ爲ニハ、藏出シノ時査定シ、徵收スル外無シ現狀ニ於テ、コハ必ズシモ不可能ニ非ズト信ズ。稅率ニ就イテ見ルニ、現行制度ニヨレバ濃度ニヨリ稅率ヲ高下シ、濃度二十迄一石二十圓ヲ課セリ。而モ我國ニ於ケル清酒濁酒皆此濃度ヲ越ユルモノナシ。故ニ事實ニ於テハ（凡テ一石二十圓均一ナリ。コハ頗ル不公平ナル稅率ト云フ可ク、宜シク清酒ヲ上中下ノ三等ニ區別シ、其上ニ優等、下ニ濁酒ヲオキ、全體ヲ五分シ、一石十七圓乃至二十五圓ヲ課スル事トナス可シ。賦課徵收ノ方法ハ形式的製品課稅主義ト納期制度トナトレリ。此納期ハ翌年七月ヨリ始メテ翌々年三月ニ終ル。カカル制度ナトリシ理由ハ、（一）酒運上ヨリ來リシ沿革上ノ理由ニ本ツク、（二）酒造家ハ資力薄弱ノモノ多ク負擔ヲ重ク感ズレバナリ、（三）納期ヲカク遅レシメタルハ民間ノ商價習ヲ認メシ結果ナリ。余ハ之ニ對シテ藏出課稅法ヲ主張ス理論上ヨリハ、減量ヲ輕ク見過ゲル恐ナク、轉嫁ノ事亦最易ク行ハル。實際ヨリ見ルニ、國庫收入上何等ノ打擊ヲモ與ヘズ。マタ國庫收入ノ定期主義ニヨルモノ、四月二百十萬圓（五月二百萬圓、六月二千三百萬圓、七月二千六百萬圓位ニシテ、酒稅

ノ七月ニ納入セラルル事ハ、年度始ニ大藏證券ヲ發行スル大原因ナルガ、藏出主義ナトラバ七月以前ニ入り來ルモノ多カラン。監督ノ上ヨリ見ルニ、勿論ソハ今ヨリモ面倒トナル可キモ、課税ノ公平ナ期センガ爲ナラバ、監督ヲ惜ム可キニ非ズ。カクテ藏出主義ノ便否ハ、ニカカリテ、納税者ノ問題トナル。ソハ勿論持越酒(四百萬石中毎年約百八十萬石)ニ對シテハ關係ナシ。ソレ以外ノ部分ニ關シテモ、擔保ヲ提供シタルモノニ、徵收猶豫ノ特典ヲ與フル事トシ、有價證券以外不動産ヲ擔保スル事ヲ得シメバ、擔保者尙不便ヲ感ズル事ナカル可シ。

醬油稅ハ現行制度ニ於テ、醬油ハモロミ一石ニツキ一圓七十五錢、溜精製品一石ニツキ一圓六十五錢ナルガ、モロミヲ以テ課税ノ標準トナスハ、事醬油業者ノ運動ニ出アタルモノニシテ實ハ時勢後レナリ。コレ亦藏出ノ時、製品トシテ査定シ徵收スルヲ可ナリトス。自家用醬油稅ハ納税者數百五十萬人、納税額一石未満一圓二石未満二圓、此輕稅ノ納期チ二分シタルハ丁寧ニ過デ。織物稅ニ就イテハ、第一織物ノ範圍ハ甚漠然トシテ、メリヤス、眞田、リボン等ニツキテモ疑問アルガ、今其範圍ノ制限ニ關シテ秘密ノ訓令アリ。稅率ノ問題ハ從價從量ノ何レトトル可キカハ決シ難シ、一般消費稅ノ原則ニ從ヒ、主ニ從量法ニヨルヲ可トス可キカ、從價法ニヨルモ、總テヲ通ジテ一割ノ課税ヲナセル現在ノ制度ハ甚シク不公平ナリ。砂糖稅ハ藏出主義ニヨリ、稅率ハ色ニヨリテ區別セラル、純分多キモノハ其色白キナリ。然レドモ實際ニ於テハ三四年前法規ヲ改正シテ、原料課稅法ニ似タル主義ヲトレリ。即チ、原料糖ヲ精製シタル時生ズ可キ五種品幾何、三

種品幾何ト云フ歩合ヲ計算シテ、原料糖ノ上ニ課税ス。此歩合ヲ全國ノ平均ニ合致セシムル事困難ナルノミナラズ、手續ヲ寬ニシタル丈、弊害ヲ伴ヘリ。石油稅ニ關シテハ、理論上ハ兎ニ角、實際上ノ問題トシテハ、小川博士ノ說ニ實シ難シ。電燈事業ナホ未ダ盛ナラザル時ニ當リ、之ニ課税セバ其發達ヲ害スル事ナキヤ。

要スルニ、我國消費稅ノ第一缺點ハ政府ノ實利主義ヲ執レル事ナリ。負擔ヲ公平ニセンセバ監督費徵稅費ヲ増スガ故ニ、敢テ之ヲ避ケツツアリ、コレ實ニ課税ノ公平ヲ眼中ニ置カザル處置ナリ。

工藤學士ノ講演ハモト二十四日ニ行ハル可キモノナリシヲ、討議問題ト關聯セルガ故ヲ以テ此日ニ繰上ゲタルモノナリ。右終リテ討議ニ入ル。時既ニ夜九時。

### 第一席

法學博士

高野岩二郎氏

小川博士ニ承ハリ度シ、現在缺點ヲ藏スル各種租稅殊ニ各種消費稅ヲ改正ストセバ何レチ先ニス可キカ、又ソレヨリ生ズル收入ノ缺陷チ何ニヨリテ補フ見込ナリヤ。

### 第二席

法學博士

小川郷太郎氏

社會政策ノ見地ヨリ稅制ヲ整理ストモ收入ノ非常ナル減少ヲ見ル事無カル可シ。廢減稅ヲ行ハバ非常ナル減少ヲ來ス可キモ廢減稅其物ノ不可ナルハ述ベタル所ノ如シ。消費稅ノ改正ハ設ケラルル範圍ニ於テ階段ヲ設ケ富者ノ消費スベキ物ニハ重ク課シ

以テ其税率ヲ加減セバ收入ノ減少ヲ見ル事無カル可シ。酒稅織物稅醬油稅ノ如キ皆然リ、電燈稅ニシキテハ工務學士ノ異論アリシモ之ニ服スルヲ得ズ、電燈ハ今日ニ於テ案外ニ普及セリ、且其廉價ナラザル一原因ガ獨占ノ爲ナリトセバ、獨占價格ノ理ニヨリ課稅スルトモ必スシモ電燈料ノ高クナルト限フズ從テ電燈ノ發達ヲ妨クル事無カラシ。其他新設シ得ル消費稅ノ種目多カル可シ、奢侈稅ニ關スルモノコレ也、ナホ、消費稅ヲ課スル一方法トモ見ルベキ專賣制度ハ擴張スベキモノナリト信ス、此制度ハ非難スル者アレドモ消費物ノ質ニヨリテ價ヲ異ニスルコトヲ得、以テ富者ニ重ク、貧者ニ輕グルコトヲ得ベク社會政策ノ目的ニ適フベシ。次ニ收利稅即チ所謂直接稅ニ就テ見ルニ社會政策ヨリ見テ重要ナルハ土地增價稅ニアラン。今日ノ如ク都市ノ地價暴騰セル際ニハ之ニ課稅スル要アリ。次ニ所得稅ヲ完成スル必要アリ、稅率重キニ抱ハラス收入少クシテ甚ダ不結果ナリ之ヲ補フ租稅トシテ收益稅ヲ完成スル事現代日本ノ急務ナリト信ズ。家屋稅モ亦土地增價稅ヲ國稅トスル如ク國稅トナス可キモノナリ。マタ、有價證券ヲ所持スル資本家ノ數増加ス可キガ故ニ此際、資本利子稅ヲ公債社債ノ所有者ニ課ス可シ。之ト同ハニ第二種所得稅ヲ廢シ公債社債ノ利子ハ他ノ所得ト合シテ所得稅ノ累進率ヲ適用シ、以テ一般所得稅ノ趣旨ヲ完フスベシ、會社ノ配當金モ之ト同シク之ヲ受クル人ノ他ノ所得ト合シテ所得稅ノ累進率ヲ適用スベシ、或ハ會社ノ純所得ニ課スル以上社員又ハ株主ノ受クル配當金ニ課スル必要ナク、配當金ニ稅スレハ會社所得ニ課スベカラズト云ハンモ、會社ノ配當金以外ニモ純益ヲ

有ス、其純益ニ對シ會社稅トシテ課稅スル必要ハ別ニ存スルナリ。財產稅ニ關シテハ先ツ今ノ相續稅ヲ完成ス可シ、相續稅ハ個人ノ財產ニ適用セラレ法人ノ財產ニ適用セラレス、然ルニ向後法人ノ財產ハ増加スル傾向アルガ故ニ個人ノ相續稅ニ適應スベキ法人ノ財產稅ヲ起ス必要アルモノトス。

## 第二席

法學博士 高野岩三郎氏

直接稅ヲ貴說ノ如ク整理スル事ハ至極實感ナルガ、之ニヨリテ收入増加ス可ク、増加セバソレ丈消費稅ノ方面ニ於テ減稅ヲ行フ事トセンカ、負擔ノ不公平ヲ減ゼザヤト思ハル。特ニ鹽ノ專賣ハ廢止シタシ、マタ石油稅モ廢止スル事トセバ如何ト信ズ。

## 第四席

法學博士 小川郷太郎氏

我國ニ於テモ國家ノ經費ハ愈増加スルモノナル可ク、收入ノ増加ハ亦之ニ相應ズルヲ要ス。此見地ヨリセバ稅制ヲ如何ニ經費増加ノ趨勢ニ適應セシム可キヤト云フ事問題ナラン。消費稅目ノ廢止ニ就テハ之ヲ說カザリシモ、鹽專賣ノ廢止ニ就テハ同感アリ、食物ニ對スル消費稅ハ漸次廢止セララル性質ヲ有ス。從テ米ノ輸入稅ノ如キモ廢止セラルベキモノトス。マタ通行稅モ之ヲ電車ニ就テ課スルハ不當ナリ。汽車汽船ノ通行稅ハ之ヲ廢スベカラズ。

## 第五席

工藤重義氏

田中博士ハわぐねるノ社會政策ノ稅制ニ關スル主張ヲ斥ケ給付能力說ニヨリテ說明スベシト云ハレタルガ、わぐねるモ亦給付能力ニヨリテ之ヲ說ケル也、畢竟一說ハ其歸ヲ一ニス唯或場合

ニ於テハ少シク異ナリ。土地増價税ニ就イテわづめるハ増價ノ三分ノ一ヲ徵收スルモ二分ノ一ヲ徵集スルモ可ナリト云ヘルガ、給付能力説ニヨラバ之ヲ許容ス可クモ非ズ。ナホ小川博士ノ家屋税説ニハ賛成スルヲ得ズ。住居セル家屋ヲ所有スルモノ少キガ故ニ轉嫁極メテ容易ニ行ハレン。マタ國税トシテ徵收スル事トナラバ何ヲ課税ノ標準トスルカ、都鄙事情ヲ異ニスル事多クレバ之ヲ一定スル事頗ル困難ナラン。日本ノ營業稅ハマダ不都合千萬ナリ、人ノ自由ノ權利内ニ立入ラスシテ課税スルヲ得ルガ故ニ創メタル佛ノ制度ヲ模シテ、而モ事實其長所ヲ汲却セリ。營業稅ノ標準ヲ變ジテ收益ニ課スルモノトナシ、所得稅ニ於テハ純所得主義ヲトリテ二者ヲ對立セシメタシ。其他(一)資本利子稅ハ理論トシテハ深ク賛成ナリ、然レトモ、其方法ハ甚ダ困難ナル可ク、之ニ就テ何等具體的ノ考無シ、殊ニ無記名社債ニ關シテ然リ所得稅率ヲ重クシテ之ニ代フルニ若カズ。(二)會社課稅ノ說ハ尤モナリト考ヘタリ、輕率モテ會社其物ニ課税スルモ不可ナシト信ズ。(三)日本ノ相續稅ハ事實不動産相續稅ニシテ之ニヨリ苦メルハ田舎ノ農氏ナリ、銀行預金等ハ殆ド總テ稅ヲ連レ居レリ。銀行ニ對シテ預金ノ検査ヲナスヲ許ス事トシタシ。(四)間接稅ニ至リテハ廢止ス可キモノナシ、余ハ軍備擴張論者ナリ。

# 第六席

法學博士

小川郷太郎氏

工藤學士ノ說ハ大體ニ於テ自說ト異ナラズ、家屋稅ハ技術上困難ナル可シト雖租稅ハ何レノ種ヲ問ハズ皆多少此困難ヲ伴ハサルモノナシ、困難ナルガ爲ニ稅其物ヲ不可ナリトナス可カラズ。貸付資本稅ハ個人ノ貸借ヲ稅スル事固ヨリ困難ナリ、技術上、有

價證券ニ限ル可シ、無記名證券ヲ稅スル方法無シトハ受取レズ、無記名證券ト雖トモ債權者ニハ債務者ニ對シ利札其他ヲ提供シテ利子ヲ受取ルモノナレハ之ヲ捉フルニト雖カラザレバ也。

# 第七席

工藤重義氏

家屋稅ニ就キテハ轉嫁ノ有無ガ主要ナル論點ナリ、之ヲ設クルモ重稅ヲ課セバ不可ナリ。寧ろ地方稅トシテ輕率ヲ課ス可シ。立法ノ趨勢ニ見ルニ普魯西ノ如キモ之ヲ地方稅ニ移シタリ。資本利子稅ニ關シテハ余ハ所得稅ヲ重クセントシ、小川博士ハ資本利子稅ヲ別ニ與サントス、課稅ノ目的ニシテ一ナラバ之ヲ二分スル必要ナシ。

# 第八席

法學博士

小川郷太郎氏

所得稅ト資本利子稅トハ二重ニ課セサル可カラザル理由ハ反覆之ヲ説明シタリ。形式的ニ二重ナリ實質ニ於テ一重ナリ。

# 第九席

工藤重義氏

二者ヲ所得稅中ニ合一セシメテモ可ナラズヤ、資本利子稅トシテハ轉嫁生シ易カル可シ、所得稅ノミトセバ目的ヲ達シ易カラシ。

# 第十席

法學博士

福田德三氏

小川博士ノ說ニ賛成ス、日本ニハ西洋ノ稅制ヲ其儘移ス可カラザル點アリ、納稅道德モ高カラズ、徵收方法モ不完全ナリ、普魯西ノ如ク所得稅ニノミ重キヲ置ク事ヲ得ズ、資本利子稅ニテ捕フルヲ得ル部分ニシテ負擔ヲ免レ居ルモノアリ。工藤氏ノ說ハ

實際ノ問題トシテハ不可ナリ。西洋ニ於テ例少シトスルモ我國ニ於テハ實行ス可シ。マタ小川博士ノ營業稅不可廢論ハ頗ル快心ナリ。地租ハ更ニ増徴ス可シ。家屋稅ニ就キテハ小川博士ニ賛成セザレドモ其主張チセラルルハ不可ナカラン。思フニ地方稅トシテ可ナル可ク國稅トシテハ不可ナル可キカ。

討論終リテ散會。

二十四日午前九時ヨリ再ビ高等商業學校大講堂

ニテ、開會講演ハ順次左ノ如クニ行ハル。

### 第一席 文明カ幸福カ 高田保馬氏

文明ハコレ欲望満足ノ増加ナリ。然レドモ、此増加ヨリモ欲望ソノモノノ増加ハ更ニ速ナリ。從ヒテ、文明ノ進ムニツレテ幸福ハ減少ス。コレ幸福ハ充タサレザル欲望ニヨリテ決定セラルレバナリ。自殺ノ統計ハ此事實ヲ明示ス。故ニ、幸福ヲ以テ理想トナサバ文明ヲ棄フ可キニ非ズ。文明ヲ願ハバ幸福ヲ斷念ス可シ。吾人ハ其中何レカ一ヲ選ハサル可カラザルナリ。

### 第二席 社會政策ト個人

東京法科大學助教授 渡邊鐵造氏

社會生活ハ個人ノ生存ニ缺ケ可カラザル前提ナレド、マタ社會生活ヲ營ム間ニハ種々ナル利害ノ衝突ヲ生ズ。此衝突ヲ調和セシムガ爲ニハ數多ノ方便アル可キモ、社會政策亦其一ニ居ル。此社會政策ガ充分ニ效果ヲ奏シテ其目的ヲ達センガ爲ニハ、一方個人ノ自助ヲ要シ他方社會ノ側ニ於ケル個人ノ尊重ヲ要ス。勞働組合ノ如キハ社會政策ノ實行上最も必要ナルニ拘ハラズ、個人

ノ自覺ナキ所到底完全ニ組織セラルル事ヲ得ズ。マタ、社會ハ個人ヲ充分ニ尊重シテ、之ヲ弱者ト考フル事ナク、其自覺ヲ喚起シ奮勵努力セシム可シ。個人ノ自助充分ナラバ社會ノ側ヨリ何等ノ設備ナシテ事ナクモ、社會政策ハ自ら實現セラルルニ至ラン。然ルニ我國ノ現狀ヲ見ルニ勞働者ニアリテハ個人的自覺全ク無ク努力ノ精神缺如セリ。而シテ社會モ亦之ヲ弱者トシテ遇シ其自覺ヲ阻止スル形勢アリ。コノ大勢ニシテ改マラズバ、社會政策ハ決シテ其十全ナル效果ヲ舉ゲル事能ハザルナリ。

### 第三席 經濟政策ノ歸趣

東京高等商業學校講師 左右田喜一郎氏

經濟政策ハ經濟生活ヲシテ一定ノ方向ヲ取ラシメ、或特定ノ結果ヲ實現セシム可キ意識的努力ナリ。而シテ其歸趣如何ヲ見ルニハ經濟生活ノ Sinn 如何ヲ見ル事ヲ要シ、經濟哲學ノ問題ニ關レザルヲ得ズ。

經濟生活ハ内外生活トシテ見タル人文生活ノ一面的解釋ナリト云フ事ヲ得可シ。此内外生活外界自然ヲ通シテ、吾人ノ之ヲ認識スルニ當リ Sinnel, Windelband, Rickert 等ノ云ヒシ如ク二ノ見方アリ。吾人が興味ヲ以テ研究スル事物經過ニハ共通ノモノアリ、勿論同一物ハ世ニ存在シ得ザルモ、其個性ハ何等ノ興味ヲ有セズ、總テガ類概念ノ一トシテ意味ヲ有スルニ止マル場合アリ。對象ノ一群ヲ見共通ノモノノミニ興味ヲ限ル事ニヨリテ、世ニ同ジキモノノ二ツ以上存在スル事ヲ考フルハ不可ナレドモ、吾人ハ之ヲ類概念ノ一ト考アル事ニヨリテ、見渡シノ付カ

サル内外界ノ對象ヲ簡單ニス、之ニヨリテ自然科學ハ可能トナリ究局ハ自然法則トナル。マタ、他物ト異ナル特有性アル事ニヨリ興味ヲ起ス事モ事實ナリ。カクテ、對象ノ各ニ於テ其個性ヲ見ル亦一ノ見地ナリ。此時、個性ヲ見ルト云フモノハ一個ノモノヲ生キ寫シニ認識スルノ謂ナラズ、特別ノ目標ニヨリテ之ニ重要ナル要素ヲ一ニ集メテ、個性ヲ認ムルニアリ。ココニ云フ個性ニアリテハ其重要意義が見方ノ中心ナリ、即チ價值が觀念構成ノ目的トナレリ。之ニヨリ歴史學ハ自然科學ニ對シ、一ノ特別ナル認識目的ヲ有スル學トシテ成立スル事ヲ得ルナリ。

内外生活ヲ認識スルニ當リ、普遍化的見地ヨリスルカ又ハ目的論の見地ヨリスルカニ從ヒ、内外ノ生活ハ一方心理學ニ於ケルガ如キモノトナリ、他方ニハ人文史學ノ對象トナル。而シテ、經濟生活ハソガ經濟ト云フ一ノ史のKategorieニ制約セラルルヨリ全體トシテ見レバ一種ノ史の生活トシテ認識セラル。

以上ノ理由ニヨリテ、經濟生活ハ史の生活ノ一面の解釋ナリ。ソハ與ヘラレタルモノトシテ客觀のニ存在スルニ非ズ。外界ノ認識ニ於テnaiver Realismusニヨルヲ得ザルト同シク、經濟生活ニ關シテモ亦然リ。史の生活モ史のSollenニ關ハリテ、始メテ史の生活トシテ認識セラル。コレ歴史の觀念主義ナリ。從ヒテ經濟生活モ亦、經濟の人文價值ト云フ形式的ナルSollenニ關ハリテ始メテ可能ナリ。此ノSollenハ其認識ノ關ハル可キ範圍ニ於テ論ズレバ何等内容の制約ヲ許ス事能ハズ。Sollenニ内容ヲ入ルルトセバソレヨリソレヘト更ニ内容ヲbedingenスルモノ必要トナルガ故ニ、究局先驗的ナルSollenハ形式タルニ

終リ、内容の制約ヲ許ササル事トナラザル可カラザルナリ。此際認識對象ガSollenニ關ハルト云フ事ニ就キテ二説アリ。(一) Rickettニヨレバ、精神科學ニアリテハ、認識對象が意義ヲ有スルヤ否ヲ見ザル可カラズ。コレ即チ、ソガ消極的又ハ積極的ニ價值ヲ有スルヤヲ見ルノミ。關係セシムルノミニシテ、評價(價值判斷)スルニ非ズ。(二) Zohliハ之ニ對シテ曰ク、價值ニ關ハラシムルハコレ評價スルナリト。然レドモ、此爭論ハ論理上ノ可能ト心理上ノ可能トヲ混同シタルモノナリ。二者ハ心理的ニハ區別スル事ヲ得ズ、論理的ニハ區別シ得ラル可シ。此ノ如クハSollenニ關シテ人文生活ハ認識論上可能トナリ、マタ之ニ照シテ價值判斷ヲ下サラレテ、ココニ政策ノ根基置カル。社會政策ハ實ニ此評價ニヨリテ可能トナルナリ。カクテ一般の人文價值ナルSollen即チ形式ハ一切ノ基礎ニシテ、史の生活ハ之ヲ内容のニ實現スル過程ノ一切ナリ。カク考フルニ於イテココニ理想ヲ生ジ、不斷ノ努力起リ、人生ノ悠久ハジメテ意義アリ。而シテ、此ノ如カラシムルモノハ、一般の人文價值が先天的形式ニシテ何等内容の制約ヲ有セザルガ故ナリ。若シ夫レ、假ニ此場合、生存權ヲ以テSollenノ内容ナリトセンカ。單ニ人トシテ生レタリト云フ單純ナル自然の經過ニヨリ、一ノ權利ヲ取得ス可キニ非ズ。Sollenハ導キ得ラザルナリ。之ヲ立證セントセバ、ソガ社會生存ニ取リテ必要ナリト云フ外理由ナシ。然レドモ、何故ニ社會生存ノ必要アリヤ。推シツメテ考フレバ、内容の制約ヲ許サザル一般の人文價值ニ到達セザル可カラズ。マタhistorisch r Materialismusニ見ルニ、共產黨宣言ニ於イテハ、



歴史ノ經過ヲ以テ階級ノ爭鬪ト見、無産者ノ勝利ヲ以テ絕對價值ノ内容トナシタリ。然レドモ、一階級ノ他ノ階級ニ對スル勝利が普遍妥當性ヲ有スル價值ノ内容タリ得ザルハ明ナリ。此ノ如ク論ジ來レバ、如何ナル内容モ妥當タリ得ズ、タダ Solten ハ形式トシテノミ存在セザル可カラズ。

經濟生活ハ經濟的人文價值ニ關ハリテ認識論的ニ可能トナリ、此價值ニ照サレテ評價行ハルルヨリコニ經濟政策ハ根基ヲ與ヘラル。而シテ經濟生活ハ之ヲ實現ノ方面ヨリ見レバ此形式ノ實現ノ過程ナリ。之ニ特定ノ方向ヲ與ヘ或ル結果ヲ生セシム可キ意識の努力ヲ經濟政策ト云フ。此經濟政策ノ歸趣ハ此規範實現ノ内容が客觀的普遍的妥當性ヲ具有ス可シトノ要求ニ存ス規範ノ内容が Allgemeingültigkeit ヲ有ス可シト云フハ、規範が必然起ラザルヲ得ズ、マタ解ク事ヲ得ザル意味ニテ、コレ一ノ Idee ナリ、konstitutes Prinzip ナルヲ云フ。然リ、認識ノ對象トシテ此規範ノ内容ヲ得ン事ニ絕對的ニ不可能ニシテ、其試ハ古來跡ヲ絶タサザルニ拘ハラズ、盡ク失敗セリ。形而上學ヲ排斥セル今日、カカル内容ノ認識ノ對象トシテ不可能ナルヲ知リ乍ラ、ナホ規範ト内容トノ間ニ吾人ノ經驗ヲ超越シタル本質的結合ヲ思フコトナクシテ己ミウルカコレ經濟哲學最終ノ問題ナリ。經濟政策ノ歸趣ハ解明ナ此中ニ求メザル可カラズ。反覆シテ云フ、經驗的實在ヲ第一次的實在トシテ、之ヲ經驗界ノ背後ニ認ムル形而上學ノ不成立ヲ知リ乍ラ、Allgemeingültigkeit ヲ思ハサルヲ得ザル所ニ經濟政策ハ其根據ト歸趣トヲ有ス。

右畢リテ暫時休憩、午後一時再び開會、第十回

雜報

大會委員ノ撰定ニ入ル。福田博士ノ動議ニ本ヅキ司會者金井博士ノ指名ニ委スル事ニ決ス。撰定セラレタルハ常任幹事金井延、桑田熊藏、高野岩二郎、中島信虎四氏ノ外、河上肇、淺川榮次郎、三邊金藏、藤本幸太郎、坂西由藏、楠田民藏、關口賢一郎、堀江歸一ノ八氏ナリ。次デ講演ニ移ル。

第四席 本邦人ノ月別死亡ニ關スル研究

内閣統計官 二階堂保則氏

明治三十二年以來ノ統計ニ就テ、本邦人ノ月別死亡ヲ比例數ニトリ、之ヲ曲線ヲ以テ描クニ、(一)ノ山ヲ生ジ、前ノ山低ク後ノ山高シ。換言スレバ、冬夏ニ死亡多キモ、夏ニ於イテ殊ニ大ナリ。(二)男女別ニツキテ見ルニ、前ノ山ニハ男ノ方高ク、後ノ山ニハ女ノ方高シ。冬ハ男ノ死亡ノ方多ク、夏ハ女ノ死亡ノ方多シ。此ノ如キハ日本ノ如キ社會ニ於ケル自然ノ狀態ナルカ。各國ノ死亡統計ニ就イテ月別死亡ノ定型ヲ觀察スルニ、(一)冬ニ山アルモ(ノ諸感)、(二)山アリテ冬ノ山高キモノ(獨逸)、(三)二山アリテ夏ノ山高キモノ(西班牙)、(四)夏ニ山アルモノ(比利賓)ノ四アリ日本ノ曲線ハ第三ノ定型ニ屬ス、コハ緯度ノ關係上自然ノ曲線ト云フ外ナシ。次ニ男ノ死亡ノ冬ニ多ク、女ノ死亡ノ夏ニ多キハ何故ナリヤ。思フニ、日本ノ男子ニ呼吸病多ク、女子ニ胃腸病多シ。而シテ呼吸器病ハ冬ニ多ク人ヲ殺シ、胃腸病ハ夏ニ多クトレシムル事モ其一原因ナラン。然レドモ、更ニ重ナル原因ハ結核性

疾患ニヨル月別死亡ノ男女間ニ著シキ差異アル事ナリ。該疾患ニヨル死亡ノ頂點ハ男子ニアリテハ冬ニアリ女子ニアリテハ夏ニアリ。コハ歐洲ニ認メラレザル事ナルガ思フニ、コレ日本ノ女子ガ暴ニ對スル抵抗力乏シキガ故ニ非ズヤ。而シテ此抵抗力ハ營養ニ關係ス、宜シク女子ノ營養ヲ改善セザル可カラザルナリ。今日ノ如ク、女子ガ哺乳スル必要アルノミナラズ、職業のニ活動スル場合ニ於テ特ニ然リ。

## 第五席 營利主義ト慈善主義

神戸高等商業學校教授

坂西由藏氏

人類社會ガ相互ノ經濟關係ニ於テ、無償主義ノ生活ヨリ營利主義即チ貨幣有償主義ノ生活ニ至ル過程ハ、一面ヨリ見レバ個性發達ノ過程ナリ個人ノ力弱クシテ互ニ相助クル時代ヨリ、獨立獨行ノ時代ニ移レル譯ナルガ、獨立獨行スル爲ニハ個人ニ充分ナル活動ノ自由ヲ認メザル可カラズ。營利主義發達更ハ自由發達史ナリ。カクテ今日ノ經濟生活ハ自由、人格ノ尊重ヲ基礎トシテ築カレ、個人ノ自立自營ヲ根本ノ原則トス。此立場ヲ忘レタル經濟政策ハ有害無益ナリ。社會政策トテモ勞働者ヲ弱者トシテ哀レムト云フ見地ニ立ツ可キニ非ズ。有償主義ヲ嚴守シ、タダ其個人の發達ヲ完クセシメ、自立ノ實ヲ譽ケシムルヲ期ス可キナリ然レドモ、現代社會一於テナホ、無償主義ノ原則ガ消滅シタル譯ニ非ズシテナホ無償主義ノ原則ノ殘存セルヲ見ル。(一)家族制度、コハ社會發達ノ程度低キ程殘存セリ。(二)慈善制度、基督教的見解ハ慈善制度ハ營利主義ニ伴フ可キモノナリナス、而モ、ユレ

ヲチ支配スル慈善主義即チ無償主義ハ、今日ノ經濟生活ト相容ルル能ハザルモノニシテ、經濟生活ノ發達ヲ妨ケツアルモノナルヲ忘ル可カラズ。

## 第六席 倫理ノ要求ト經濟ノ組織

慶應義塾大學教授 三邊金藏氏

倫理ノ最高善ハ自己ノ満足ヲ得ルト共ニ他人ニモ満足ヲ得セシメトスルニアリ。而シテ現代ノ經濟生活ニ於テ此倫理ノ要求ヲ充タサントスルハ不可能ヲ強フルモノナリ。現代ノ經濟生活ハ分業ト交換トチ手段トスル營利主義自由主義ノ上ニ立テリ。從ヒテ現在ノ社會ニ於テハ、倫理ノ要求ニ極端ニ忠實ナルモノハ社會的制裁ヲ受ケ、道德ヲ無視スルモノ經濟生活ニ没頭スルモノハ、社會ノ強者トナル。此ノ如キ社會ニ於テ倫理ノ要求ニ從ヘト云フモノ、事行ハル可キニ非ズ。社會ヲシテ倫理ノ支配スル所トナラシメン爲ニハ、宜シク經濟ノ組織ヲ改メザル可カラザルナリ。然ラバ之ヲ如何ニ改良ス可キカ、之ニ二ノ答案アリ。社會主義及ヒ社會改良主義コレナリ。而モ前者ハ現代ト餘リニカケ離レタルモノニシテ、其實行ハ危險ナリ、余ハ後者ノ實現ヲ欲スルモノナリ。

## 第七席 社會政策ノ理想

京都大學講師

瀧正雄氏

經濟生活トハ人生ニ必要ナル物質的條件ヲ調達スル生活ニシテ享樂生活ノ基礎從ヒテ全人生ノ基礎アリト云ハザル可カラズ。從ヒテ社會ノ幸福ヲ増進セン爲ニハ此經濟生活ヲ豐富ナラシメ

サルベカラザルニ拘ハラズ、現代ノ社會組織ニ於テハ既ニ生産力ハ行キ詰リノ狀態ニアリ。資本家ノ得ル所ヲ奪ヒテ勞働者ニ與フルモ其額極メテ少シ。コレ各國ノ生産統計ノ示セル所ナリ。從ヒテ、現代ノ經濟組織タル私有財産制度ヲ認ムル所ノ社會改良主義ハ其効果甚ダ疑フ可シ。眞ニ社會ノ救済ヲ以テ任トスル政策ハ生産ノ方面ニ於ケル勞力ト資本トノ徒費ニ着眼スルモノナラザル可カラズ。吾人ハココニ企業ノ公營ト資本ノ公有トヲ主張セントスルモノナリ。

## 第八席 戰爭ト農業

東北農科大學教授法學博士 高岡熊雄氏

希臘時代ニ於テ既ニ、一國ノ軍備ヲ強大ナラシメンニハ農業ヲ盛ニス可シト云フ議論アリシガ、最近此問題ニ特別ノ注意ヲ拂ヒシモノハ獨逸ナリ。獨逸ハ從來、農業ヲ以テ重ナル産業トナセシガ、近來商工業盛トナリ、農業人口益減少シツツアリ。從ヒテ、農業ノ斯ク衰フルハ憂フ可キヤ否ヤト云フ事、議論セラレツツアルガ、ソハ單ニ獨逸ノ問題ニ非ズ、マタ我國ノ問題ナリ。余ハ今、之ヲ兵力ノ充實ト農業ノ關係、軍實ノ供給ト農業、戰時食物ノ供給ト農業ト云フ三方面ヨリ論ゼント欲ス。

兵員ノ充實ハ強兵ノ一大要件ナルガ、之ヲ決定スル種々ナル條件アリ。其一ハ、國內ニ於ケル人口ノ多少ナリ、他ノ條件一ナラバ人口多クバ多クノ兵員ヲ出シ得可シ。此點ニ於テ、四千萬ノ人口ヲ有スル佛ハ六千萬ノ人口ヲ有スル獨ノ敵ニ非ズ、日本ハ人口五千三百萬ヲ有シ、強國ノ列ニ伍シテ劣ル所無シ。注意ス可キハ、此人口ガ如何ナル職業ニ従事セリヤト云フ事ナリ。先戶數

九百四十三萬中、五割八分ハ農家ナレバ、五千三百萬中過半數ハ農民ナラン。サテ、人口ノ大ナルチ尙アトセバ、人口増加ノ希フ可キハ言テ俟タズ。然ルニ人口増減ハ移住ト自然増減トニヨルト雖、我國ニ於テテ移住ハ問題トナスニ足ラズ。人口増加ヲ計ラントセバ、自然増加ニ俟タザル可カラズ。而シテ、都市ト田舎トノ間ニハ自然増加率ニ著シキ差異アリ。明治四十四年ノ調査ニヨルニ、全國平均ノ自然増加ハ千人ニ就キ一六七、人口五千以上ノ都市ニアリテハ九、五ナリ、而シテ都市ノ自然増加ハ、多クバ、田舎ヨリ新鮮ナル血液ヲ供給シタル結果ニ外ナラズ。將來我人口ヲ増加セシメ、兵力ヲ充實セシメンニハ、田舎從ヒテ農業ノ發達ヲ計ルニ若クハ無シ。又農民ハ天折スル事少ク、身體強健ニシテ勇氣服從ノ美德ヲ具フル點ニ於テ、最モ兵士タルニ適セリ。次ニ、軍實ノ供給ト農業ノ關係ニ就テ見ン。現代ハ財力ノ競争ノ世ニシテ、戰爭モ亦一面財力ノ競爭ノ觀ナカラズ。今回ノ大動亂一年間ノ戰費二百八十億ナリト云フ、其他財産ノ損失人ノ死傷ヲ合スレバ遙ニ多額ニ上ラン。而シテ、勝利ヲ占メンニハ最後迄軍實ヲ供給スル覺悟ヲ有セザル可カラズ。然ルニ一國ノ軍實ハ其富力生産力ノ多寡ト密接ノ關係ヲ有ス。我國ノ富力ハ明治三十九年ニ於テ二百二十七億圓ナリシト計上セラル。此中五割七分ハ農業界ニ屬ス。生産力ハ約三千億圓ナリ、内五割三分ハ農業ノ生産力ナリ。軍實ノ負擔亦農民ガ多クナシ得ル事ヲ知ル可シ。

ナホ、戰時食物ノ供給ニ就テ考ヘン。今日各國ハ世界的分業ヲ行ヒテ、長短相補ヒ、世界ヲ舉ゲテ經濟的團體ト化シツツアリ。然

上ニ世界ヲ舉ゲテ一ノ政治團體トナサザル以上ハ或度テ超エタル分業ハ注意ヲ要ス。國民經濟ノ發展ハ最重要大事ナリ。其發展ノ爲ニ必要ナラバ世界經濟ノ發展ニ危害ヲ加フルモノナホ、分業ヲ中止セザル可カラザル場合アリ。食物供給ノ場合ノ如キ之也。歐洲ノ動亂ハ之ヲ教フ。獨逸ガ若シ英國ノ例ニ倣ヒテ、食物自給ノ計ヲスルベシトセバ如何。後進國ナル我國ハマダ、獨逸ノ例ヲ學ビテ、農業ノ重要ヲ忘ル可カラザルナリ。

右講演終リテ後、學士會俱樂部ニ於テ懇親會ヲ開ク。席上、金井博士ノ挨拶田島博士ノ答辭アリ。第十回大會ノ討議問題ハ官業及保護會社問題ト定メラル。午後十一時散會。

十月二十五日、會員中ノ有志者一行ハ東京府下八王子ナル府立織染學校、片倉製絲場、久保田擦絲整理工場并上染物工場ヲ視察シタリ。

畫餐後、府立織染學校講堂ニ於テ通俗講演會ヲ

偶感

我國ノ織物業ニ就テ

同

歐洲ノ大戰ト我國ノ經濟界

法學博士 吉野 作造氏

法學博士 小川郷太郎氏

東大助教授 渡邊 鐵藏氏

法學博士 福田 德三氏

第一卷 (第六號 一六六) 七九八

京都法學會大會記事

我法學會ハ十月三十日午後一時ヨリ本年度大會ヲ法科大學第一教室ニ開ク、荒木總長、跡部評議員長、田島、雉本、小川、富田、河上、佐々木、財部、曙道ノ諸評議員ヲ始メ會員ノ來會スル者堂ニ滿ツ、定刻トナルヤ跡部評議員長開會ヲ宣シ次デ左ノ講演アリタリ。

世襲財產制

●家庭研究材料トシテノ戸數

曄道教授  
財部教授

陸道教授ノ講演ヲ緒論ト本論ニ分チ、緒論ニ於テ家又ハ家族ノ觀念ト結付ケラルル歐米各國ノ財産制、卽世襲財産、家族財團、(Familienstiftung)ノ家族財産共有 (Gemeinschaft, indivisim)ノ家産(homestead, Heimestätte, bien de famille)及遺留分ニ付キ各國ノ現行法又ハ草案ヲ引用シテ制度ノ梗概ヲ説明シ、延テ家産制ト世襲財産制トノ比較論ヲ試ミ、其根本的ニ立法理由ヲ異ニスル別異ノ制度ニシテ同日ニ研究スヘキモノニアラス、各別ニ研究ヲ要スルモノナリト論斷シ、本論ニ入レリ。本論ハ更ニ之ヲ三分シ、先シ世襲財産制ノ沿革法制ヨリ説キ起シ、西班牙ノ mayorazgo、オランダノ fideicommissum、英國ノ entail settlement ナ述ベ、佛獨ノ沿革法制ニ及ヒ、次ニ世襲財産制ノ利弊ヲ論シ、政治上、國民道徳上、經濟上必スシモ此制度ノ廢止スヘキモノニアラサルコトヲ力説シタリ。然レトモ教

授ハ現行ノ我華族世襲財產法及第三十六議會ニ提出セラレタル改正案ノ制度ニハ根本的ニ反對ノ意見ヲ有シ、從テ現行制度又ハ改正案ノ制度ト教授ノ世襲財產存置論トハ沒交渉ノモノナル旨ヲ述ベタリ。世襲財產存置ニ關スル教授ノ意見ハ後日本誌ニ於テ發表セララルノ意アル由ナレハ茲ニ之ヲ錄セス、終ニ世襲財產ニ關スル法律問題ノ二三ト題シテ世襲財產主體、世襲財產債務、世襲財產ノ登記等ニ關スル問題ヲ論述シテ壇ヲ降レリ。

次ニ財部教授登壇、開口先ツ英獨ノ學風ニヨリ多少ノ相違ハアリ乍ラ一般ニ經濟學ノ研究上家人ニ着眼スルコト多クシテ家庭又ハ親族團體ノ國民經濟上ニ於ケル地位及作用ヲ論ンセサルヤナ疑ハレ、家庭并ニ之ニ關係アル諸觀念ヲ述ヘテ後戶數ノ說明ニ移リ、本邦現行戶數調查方法ヲ說イテ、本籍戶數本籍人口ノ比較ニヨリ、家族制度ト言フ場合ニ意味スルカ如キ家族ヲ究メ得ヘク、現住戶數、現住人口ノ比較ヲ以テ親族共同團體ノ研究材料ニ供シ得ヘキヲ議セラレ、特ニ前者ノ累年比較ニヨリ家族變遷ノ模様ヲ又後者ノ累年比較ニヨリ親族團體ノ變遷、特ニ歐米先進國ニ於ケルカ如キ親族團體崩壞離散ノ傾向ヲ伺ヒ兼メヘキヤノ疑問ヲ掲ク、カクテ先ツ計數評論ニ移ルノ前提トシテ本邦普通家庭ノ性質ヲ問ヒ、先其家庭カ親子ノ親ニヨル團體

Community from parental associations タル性質ニ當ルコトヲ指摘セラレ親族家族ニ關シ經濟上及法律上ノ觀察ヲ特ニ沿革的ニ試ミ本邦親族又ハ家族生活カ特殊家長制家族ノ餘波ヲ伺ハシムルコトヲ認メ、カクテ一見本邦普通家庭平均員人ハ多カルヘキカ如ク推測セラルルモ、法律上、實際生活上其大サナナナシムヘキ諸事由モ存スルコトヲ說キオキツツ計數ノ說明ニ移リ、第一ニ先ツ誤謬ヲ含メル本邦統計ノ基礎ニ於テモ亦一所帶平均ハ歐洲ノ材料ト大差ナキヲ說キ更ニ其變遷ヲ何フタメ明治三一年末以來每五年末ニ內閣統計局ニヨリ調査發表セララル帝國人口靜態統計ノ結果上、現住戶數一戸當リ現住人口ハ三一年末五・五五ヨリ三六年末五・五六ナ經テ十年後ノ四一年二五・五九ニ上リ、外觀上 所帶又ハ家庭漸次膨大ノ傾向ヲ伺ハシムルモ、一旦比較ノ基本タル二計數特ニ現住人口ノ利用價值ヲ攻究スルトキハ其眞價甚タ疑ハシク、此點ニツキ特ニ地方別トシテ一層詳細ノ研究ヲ進メナハ反對ノ傾向、換言スレハ歐洲先進國ト同様ノ事實舉證セラルルコトナキヲ忖セストシ、次ニ家族生活ノ變遷ニツキテハ同一根源ニ依リ、本籍人口族稱別ニ關スル材料ヲ本トシ次表ヲ作製シ得ヘシトセラル(本表ハ講演後ニ至リ教授ニヨリ供セラレ又以下ノ所說中ニモ補ハレタル點アリ)

華族 戶主一付家族主  
士族 戶主一付家族主

明治三一年末  
七・七九

明治三六年末  
七・七九

明治四一年末  
七・七九

十年間増減割合  
一・二對スル〇・六

一・二對スル一・一

平民家  
戶主ニ付家族主  
通計  
戶主ニ付家族主

戸主ニ付家族主  
戸主ニ付家族主  
戸主ニ付家族主  
戸主ニ付家族主

戸主ニ付家族主  
戸主ニ付家族主  
戸主ニ付家族主  
戸主ニ付家族主

戸主ニ付家族主  
戸主ニ付家族主  
戸主ニ付家族主  
戸主ニ付家族主

戸主ニ付家族主  
戸主ニ付家族主  
戸主ニ付家族主  
戸主ニ付家族主

試ミニ之ヲ明治二〇年末ノ戸主ニ付家族ノ數ヲ五・五士族  
三・六本籍人口通算三・八ニ對比スル際、緣事分家等ニ特別ノ手  
續ヲ要スヘキ華族間ニ於テ注目スヘキ事實トシテ家族ノ崩壞ナ  
同ハシムル以外、一般國民ニ關スル計數上寧ロ膨大ノ傾向ナ同  
ハシム、而モ亦數ノ程面ニ立入りテ考フルトキハ、特ニ戸主數  
減ト共ニ漸減スヘキ士族階級ニ於テ戸主一人當リ平均家族増加  
ノ割合最大ナルカ如キ、各人各個ノ獨立ヲ輕視シテ家門ノ結束  
ヲ鞏固ナラシムルノ精神ヲ尊重スルノ反映ナルヤ、將タ實際生  
活上漸ク個人本位ニ傾カントスル國民カ一般ニ戸籍上ノ身分ニ  
付冷淡ナルノ結果ニヨルモノ多カラサルヤ、之ニツキテハ現住  
戸數ニヨル研究材料同様に精密研究ノ必要アリト議セラレ、茲ニ  
演材ナ一轉シテ外國ノ調査例ヲ説クニトシ(一)家庭數ナ何フ  
ノ前提トシテ(二)夫婦組數調査(三)所帶ノ數及其大ナル關スル調  
査(四)親族特ニ子ノ數ニ關スル調査ニ付逐次其實例、實用、困難  
等ヲ示シ、是等調査ニヨルモ亦家庭生活研究材料トシテ完キニ  
非ス、而モ亦其不備ナル點ハ他ノ統計調査ニヨリ補足スルノ途  
ナキニ非ルヲ指示シ、末段ニ入りテ先ツ獨身者漸増ノ可否問題  
ニ牽聯シテ、外國思想界ニ自由離婚說、自由戀愛說等諸婦孺制  
論行ハルコトヲ略説シ、是等思想界ノ諸主張モ眞面目公平ノ  
態度ニヨリ探究スヘキコトナカラ約二〇年ノ昔「忠臣二君ニ  
仕ヘス貞女二夫ニ見エストハ一身ニシテ同時ニ二國ノ君ニ奉公  
スル勿レ一婦ニシテ同時ニ二人ノ夫ヲ觀ム勿レト」義ニ解釋シ

テ可ナリ」トノ新說ヲ立テ、時ノ道學者流ニヨリ良俗破壞者ト  
シテ忌憚サレシ福翁サヘモ、自由戀愛說ニツキテハ自由愛情ハ  
「道理ニ背クモノニ非スト云フモ世界ノ視ル所ニテ醜ナリ不徳  
ナリト認ムルトキハ道理ノ論ハ暗喑ニ屏息セサルヲ得ス」彼ノ  
自由論ノ如キハ心ニ思フ可クシテ口ニ言フ可ラス假令思ヒ切  
ツテ口ニ言フモ斷シテ實際ニ行フ可ラス」ト誠メラレシ事實ヲ  
引イテ、自己モ亦此演壇ニ於テ深ク之ヲ論スルヲ欲セスト説カ  
レ、統計研究者ノ分トシテハ寧ロ實況計數觀察ノ必要ヲ高調鼓  
吹スヘク、特ニ我邦ノ現況ヨリセハ(一)精密ノ所帶調査ヲ件フ  
「國勢調査」ノ實施ヲ急クコト(二)統計機關ハ現在人口統計  
原材料ノ統計ノ利用ヲ一層緻密ナラシムルコト(三)學者モ亦現  
存統計ノ利用ニ勉メ、又輒近先進國ノ風潮トシテ特ニ遺傳研究  
ノタメニ起レル Familienforschungen ノ如キ方面ニモ着眼研  
究スルコトノ必要アリトシテ其講演ヲ結ベタリ。

次キテ學生集會所ニ於ケル晚餐會ニ移ル、出  
席者二百餘。跡部學長開會ノ辭ヲ述ベラレ、又神  
戶教授ハ外國語ノ學修ノ説ヲ、佐々木教授ハ青  
年論ヲ説カレ、談笑ノ間、歡ヲ盡クシテ散會シタ  
ルハ正二午後八時ナリキ(法學會委員報)